

「平家物語」の学習指導

——「一の谷合戦の場」をとりあげて——

世羅博昭

一、研究のねらいはなに

すべての生徒が意欲的に学習に参加することができる授業を成立させるために、次の二点を明らかにしたい。

①すべての生徒に学習への興味と関心を持たせ、それを高めていくことのできる教材化と指導方法

②すべての生徒に、学習の意義を理解させ、課題意識をもって学習にとりくむことができるようにさせる教材化と指導方法

右のねらいで、学習指導をおこなったが、この報告では「教材化」のあり方に絞って検討を加えたい。

二、どのように教材化したか

(1) 「平家物語」をどのようにとらえるか

「平家物語」は言うまでもなく、平家一門の興亡の歴史を語った軍記物語である。この物語には三つの側面があり、それらが渾然一体となって平家物語の世界を形づくっているとされている。

第一の側面は、武家的側面で、軍記物語の名にふさわしく、新興武士階級や僧兵たちの勇戦奮闘場面が生き生きと描かれている。第二

の側面は、公家的側面で壮烈な戦闘描写のかげに、不幸な戦死者とその家族の悲劇王朝文化の衰滅とからみ合わせて描かれている。第三

の側面は、仏教的側面で、強大な権勢を誇った清盛以下の平氏一門が諸行無常・盛者必衰の仏教的理法の前で、はかなく滅び去った

感慨が全編を貫ぬいている。大きな歴史の中の個々の人間を無常観思想でとらえている。

「平家物語」は、これら三つの側面の韻律的な文章で語られている、長編の、いわゆる「語り物」文学である。

(2) 「平家物語」の教材化にはどのような型が考えられるか

長編物語である「平家物語」の教材化の型としては、大きくは二つ、小さくは四つの型が考えられる。

①「タテ」の教材化

⑦長編物語語である「平家物語」全体像をとらえさせようとする
教材化

⑧特定の人物をとりあげて、その人物の生き方を追求する教材
化

②「ヨコ」の教材化

⑨ある特定の場面をとりあげて、その場面の描き方をとらえさせようとする教材化

⑩ある特定の場面をとりあげて、その場面に登場するさまざまな人間の生き方を追求する教材化

(3)「教科書」の教材化をどのように考えるか

本校で使用している角川書店の教科書『高等学校古文一改訂版』には、「鹿谷」・「忠度都落」・「逆櫓」・「能登殿最期」がとられている。この教材化の型は、前述の⑦の立場に立ったものである。まず第一に、平家滅亡への端緒ともいうべき鹿の谷事件を、第二に、平家の都落ちの中でもとくに美しくも悲しい忠度の都落ちを、第三に、一転して平家を打ち破る源氏の武将源義経の勇敢な様子を描いた「逆櫓」を、第四に、平家の滅亡をつける「能登殿最期」をとりあげている。

この教科書の編集者は、この教材化によって、「平家の滅亡への道をたどる」ことをねらったものであろうか。もしそうであれば、多くの分量をありあけることのできない「古典Ⅰ乙」の教材化としては、なかなか工夫がみられる。が、しかし、これら四個所の教材化だけで「平家の滅亡への道をたどる」といった平家物語の全体像をとらえさせようとするのはやはり無理がある。「古典Ⅰ乙」と

いう条件のもとでは、長編物語の全体像をとらえさせようとする教材化はまず不可能と言えよう。

(4)私はどのように教材化したか

①「学習のテーマ」をどのように設定したか

「平家物語」は長編物語であるので、一つの「学習のテーマ」を設定して、そのテーマのもとで一貫した学習を組織していくやり方が、生徒の学習意欲を持続しやすいし、学習効果もあげられるであろう。そう考えて、「学習のテーマ」を設定した。

そのテーマは、「戦乱の世の中を生きるさまざまな人間の姿をみつめよう。」とした。このようなテーマを設定したのは、高校一年生にとっては「平家物語における無常観」などよりも、戦乱の世の中を生きるさまざまな人間をとりあげて、その人間の生き方を追求する方が、生徒の興味をひくであろうと判断したからである。

②「一の谷の合戦の場」をどのように教材化したか

「戦乱の世の中を生きるさまざまな人間の姿をみつめよう。」というテーマを教材化するのに、二つの方法が考えられる。一つは、「平家物語」全体から適当な箇所をあちこちとりあげる方法（「タテ」の教材化）であり、もう一つは、ある特定の箇所を集中的にとりあげる方法（「ヨコ」の教材化）である。このたびは、後者の方法で教材化を試みた。ある特定の、同一状況の中におけるさまざまな人間の生きる姿をとりあげた方が、人間の生きる姿を比較しやすくと考えたからである。

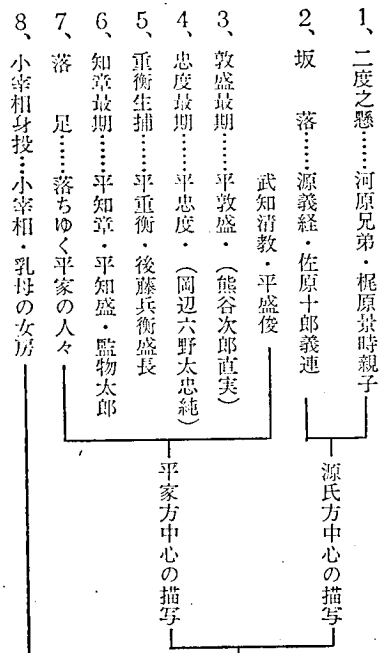
「ある特定の箇所」として、「一の谷の合戦の場」をとりあげ

た。この個所をとりあげた理由は、四つある。

⑦「一の谷の合戦の場」には、源氏方、平家方の数多くの武士と数人の女性が登場している。「天皇・皇族・公家・庶民」などは登場してこないで、あらゆる階層の人々をとりあげたとは言えないが、かなり多くの人物をとりあげることができる。同じ「一の谷の合戦の場」という状況だけに、それぞれの人物の生き方の違いがはつきりする。

⑧この「一の谷の合戦の場」は軍記物語にふさわしい源平の一大合戦の場であるので、武家的側面も十分に味わうことができる。

⑨戦死を覚悟して策に歌を結んでいた武将（平忠度）の話や、戦死した夫のあとを追って悲劇的な死をとげる女性（小宰相）の姿、



を描いた個所など、公家的側面も味わうことができる。

④この「一の谷の合戦」の中で、死ぬ者、傷つく者、勝ち名乗りをあげる者、武士であることに疑問を感じて出家する者（熊谷次郎直実）など、大きな歴史の歯車の回転の中で生きている人間はかない姿も描かれており、仏教的側面も味わうことができる。

「一の谷の合戦」関係の章は、第九巻の「三草勢揃・三草合戦・老馬・一二之懸・二度之懸・坂落・越中前司最期・忠度最期・重衡生捕・敦盛最期・知章最期・落足・小宰相身投」の十三章である。そのうち、八章をとりあげて、次のような構想で教材化した。

③どのような資料を準備したか
⑦導入のための資料……………プリント二枚

○平家物語のあらすじ……………平家物語を大きくとらえさせることと、全体の中における「一の谷の合戦の場」の位置づけを明

確にさせることを意図して作った。(東京堂『日本文学鑑賞辞典・古典編』の「平家物語の梗概」を利用)

○平家物語の「学習のテーマ」

○「一の谷の合戦の場」をとりあげた理由と学習の骨組み(授業構想)

○「一の谷の合戦」図と源平両軍の紹介

④本文編……プリント十八枚

「『平家物語』の学習——『一の谷の合戦の場』をとりあげて——という資料プリント十九枚(うち一枚は表記)を作成した。

資料の作り方を説明すると、「二度之懸・坂落・敦盛最期」は、日本古典文学大系『平家物語下』(岩波書店)を底本として、原文に傍注を施した資料をプリント十一枚作成した。「忠度最期・重衡生捕・知章最期・小宰相身投」は、日本古典文学全集『平家物語二』(小学館)を複写して、「原文に頭注と現代語訳の付いた資料」をプリント七枚作成した。(ただし、「小宰相身投」だけは全文とあげないで、初めから小宰相が海に身投げする部分までを複写した)。

私自身が作成した「原文に傍注を施した資料」は、東京都大田区石川台中学校の大村はま先生が中学生に「平家物語」・「枕草子」を指導されたときの資料づくりに学んだものである。その一部を紹介すると、次のようなものである。(「坂落」の一部)

御曹司城郭遥に見渡(おほしやくた)いておはしけるが、「馬とも落(う)ちてみる」と

て、鞍置(あしづ)き馬(うま)を追い落(お)とす。あるは足(あし)をうち折(お)て、ころんで落(お)つ、

あるは相違(あひだ)なく落(お)ちて行くもあり。鞍置(あしづ)き馬(うま)三(さん)疋(びつ)、越中前司(えちゅうぜんじ)が屋形(やしな)あるは相違(あひだ)なく落(お)ちて行くもあり。

のうえに落(お)ちついて、身(み)ぶるいしてぞ立ちたりける。御曹司(おほしやくた)これを

みて、「馬(うま)どもはぬし(お)が心得(こころえ)得(え)て落(お)とさうには損(こ)ずまいぞ。

くは落(お)とせ、義経(よしかた)を手本(てほん)にせよ」とて、まづ三十騎(さんじゆ)ばかり、ま(ま)つ先(ま)ち

さきかけて落(お)とれけり。大勢(おほしやう)みなつづいて落(お)とす。後陣(あとから)に落(お)とす人(ひと)

々のあぶみのはなは、先陣(まへから)の鎧甲(よろい)にあたるほどなり。小石(こいし)まじりの

すなごなれば、流れ落(なれお)としに二町(ふたまち)ばかりぎ(つ)と落(お)として、壇(だん)なる

ところ(ところ)にひかへたり。それより下(した)を見(み)下(くだ)せば、大(おほ)きな岩(いわ)で(お)お

本文の右側には、一行目に△印をつけて補充すべき語句をカタカナで書き、二行目に本文の傍線を施した部分に対応する現代語訳をつけた。この例にはないが、二・三行目に難語句の解説を「」の中に入れたものである。左側には、一行目に漢字の読みがなや音便の原形を、二行目には文法の説明をつけた。なお、この例にある「おはし」・「れ」の横に二重傍線を施したのは、この章では敬語と受身使役の整理をすることにしていたので、前もって生徒に注目させるようにしておいたものである。

なぜこのような資料の作り方をしたかということ、大村は先生と同じような考え方をしている安良岡康作氏の文章を引用して示したい。安良岡氏は『中学校国語科教育講座・第二巻』（有精堂）の中で、次のように述べている。

「わたくしは、古典教育の、あるいはもっと具体的には古典学習の、眼目とする所は、古典の原文を熟読し、鑑賞することにあると思う。しかし、現状では、それには、注釈上の負担が大ききく、そのために、生徒の自主的な学習が展開し難い。そこで、注釈がある程度楽にできつつ、しかも、原文に即した鑑賞が成り立つためには、いままでの現代語訳や語釈よりも適切なゆき方があることを提案したい。それは、原文に傍注をつけることである。これには、江戸時代の古典愛好者が『源氏物語』『枕草子』『徒然草』などを読むのに、『源氏物語湖月抄』（北村季吟）『枕草子』（岡西惟中）『徒然草』（閑寿）などの、傍注を施した注釈書によるが多かった事実が顧みられる。現行の国語教科書も、この伝統に学んで現代の中学生のための適切な傍注を加えた古典原文を載せるべく工夫するようここに希望しておきたい。」

この提案は中学生を対象とした古典の資料化について述べられたものであるが、高校においても活用できるものである。高校入学後、これまでに、今昔物語（三編）・古今集（十首）・伊勢物語（七段）・さまざまな愛の姿を求めて「テーマ学習」を学習してきた。一応、二学期の半ばで、文法も用言や主要な助動詞の学習も終え、辞書・文法書を活用すれば古文をある程度読むことができるようになった。そこで、この「平家物語」の学習では、「一の谷の合戦の場」をかかなりの分量とりあげて、文法・現代語訳に気を奪われないで、「戦乱の世の中を生きるさまざまな人間の姿」を追求する学習をして、古典に親しみを持たせようとした。

このような考えから、「原文に傍注を施した資料」を作成したのである。

「原文に頭注と現代語訳の付いた資料」は時間的に「原文に傍注を施した資料」づくりが間に合わなくなったことや、この「平家物語」の授業が「忠度最期」以下は三学期にまわさなければならなくなったこと、そのために冬休みを利用して「平家物語」を少しでも多く読ませておこうと考えたことよって、作成したものである。

④学習の手引き……プリント三枚

原文を深く理解させ、人物像を的確にとらえさせるため、また作者の意図なども考えさせるために「学習の手引き」を作成した。手引は、それぞれの章ごとに、柱になる大きな問題をいくつか作り、さらにそれぞれの問題の下に、その問題の解決をはかるための、必須の小さな問題を作るといふ形をとった。その小さな問題を考えなければ自然に大きな問題が解決できると同時に、問題解決のための手順をも自然に身につけることができるよう配慮した。すなわち、

内容把握のための手引きであると同時に、学習方を身につけるための手引きになるように工夫した。

「二度之懸」の「学習の手引き」の一部を紹介すると、次のようである。

「この文章は二段構成になっている。前段――河原兄弟の「先駆け」、後段――梶原景時親子の「二度之懸」。同じ源氏方でも両者を対比して描いている。対比的な描写を通して、作者は何を強調しようとしているのだろうか。

(1)河原兄弟の「先駆け」を作者はどのように描いているかを明らかにしよう。

①河原兄弟がいる場所・時刻・あたりの様子を想像せよ。また、二月七日午前六時の一斉攻撃を前にしている武士の心理を、河原兄弟のことばから想像せよ。

②河原太郎は、戦場における自己の立場をどのように認識しているか。「大名」との対比に注目してまとめよ。なお、現実には河原兄弟と後段の梶原景時親子の敵陣への突入時の違いが明確に描き分けられている。それもまとめよ。

③河原太郎は、「千方が一にも生きてかへらん事ありがたし」と、討ち死を覚悟してまで、なぜ単身敵の中へ突入しようとしているのだろうか。その理由を考えよ。

④河原次郎のことばを読んで、ア、全文を口語訳せよ。

○「兄を討たせて」・「保つべき」・「こそ……め」などに注意。

イ、文中の「栄花」とは、具体的には何か。

ウ、「栄花」を長く保つことができないと述べているが、どうしてそういえるのか。次の「所々で討たれんより」に注目して述べよ。

⑤平家方は、河原兄弟の「先駆け」をどのように受けとめ、どのように対応しているか。また、このような平家の対応のし方を描いたことよって、河原兄弟のどのような面が強調されるか。

(2)梶原景時親子の「二度之懸」を作者はどのように描いているかを明らかにしよう。(①②③④省略)

(3)作者は、この「二度之懸」で何を描こうとしたのだろうか。

三、どのように指導したか

(1)指導の目標

①登場人物の行動や心理を追求し、戦乱の世の中を生きるさまざまな人間の姿を読みとらせることよって、古典のおもしろさを感じとらせる。

②「一の谷の合戦の場」において、作者が何を描こうとしているのかを考えさせる。

③「語り物」としての平家物語への関心を高め、その表現のすばらしさを味わわせる。

(2)学習者と指導の時期

第一学年 三クラス 二学期～三学期(十一月中旬～一月下旬)

(3) 授業の経過

授業に入る前には十五時間で終わる予定であったが、実際には十七時間かかった。

以下、授業概略と板書の一部を紹介する。

① 導入 (一時間)

② ねらい

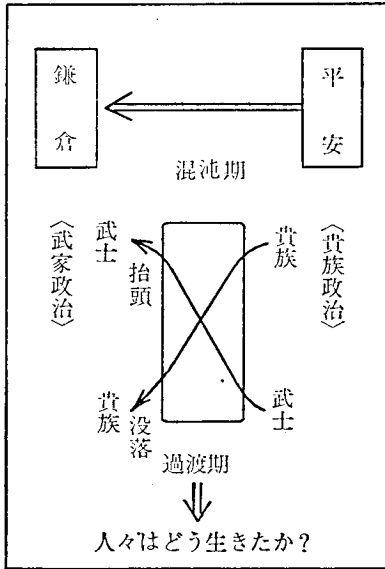
I、「平家物語」についての概略を理解させる。

2、学習目標と授業構想を提示し、今前の授業の方向をはっきりとらえさせる。

③ 導入 (一斉授業・一時間)

「平家物語」の紹介(軍記物語・語り物・時代背景)、「学習のテーマ」の提示、「一の谷の合戦の場」をとりあげた理由、「平家

〈板書〉



物語」全体のあらすじと「一の谷合戦の場」の位置づけ、「一の谷の合戦の場」の学習構想の説明、「二度之懸」までの源平両軍の流れの紹介。

② 「二度之懸」の学習 (四時間)

③ ねらい

1、戦場における河原兄弟の兄弟愛と小名ゆえの悲劇を読みとらせる。

2、戦場における梶原親子の親子愛を読みとらせる。

3、「学習の手引き」を活用して、文章を深く読む方法を身につけさせる。

④ 「二度之懸」前半(河原兄弟)の学習(一斉学習二時間)

1、「二度之懸」の意味

2、簡読・指名読み→音便の種類と効果(強さとリズム)

3、時・場所・登場人物(大体の内容をつかむ)

4、河原太郎の考え→武士階級の中で自分(小名)の位置と恩賞

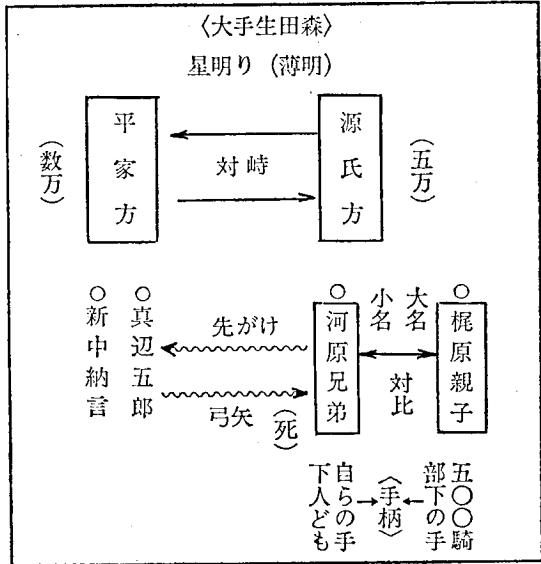
5、河原次郎の考え→戦乱の世における「栄花」のはかなさと敵陣への突入

6、河原兄弟の突入と平家方の対応→河原兄弟の哀れさ

7、音読(地の文・河原太郎・河原次郎・平家方新中納言を生徒五人に配役して読ませた。)

※「ずは」・「む」・「こそめ」・「す・さす」・「る・らる」の用法

〔板 書〕



- ② 「二度之懸」後半 (梶原親子) の学習 (二時間)
- 1、範読し、二段に分ける (一度之懸、二度之懸)
 - 2、「一度之懸」突入の様子 (河原兄弟と対比) → 大名突入
 - 3、梶原景高の心理へグループ学習
 - ▽「先がけ」の理由……○恩賞めあて ○河原兄弟の仇討
 - 若い血がおどりの功名心に燃える ○次男坊だから長男に對する競争心 ○戦いを有利にしたい など。
 - 4、これに對する父景時の対応
 - 5、「二度之懸」の時の父景時の心理と行動 (子を思う父親の心

情)

長男景季行方不明↓子どものために「二度之懸」↓わが身を考えず(子どもの安否を心配) ↓子どもを発見↓「いまだ討たざりけり」(安堵・喜び) ↓教育(武士としての心得)敵に背を見せるな・戦いは臨機応変に)

6、「二度之懸」全体のため——河原兄弟と梶原親子に對する作者の描き方——

7、音読 (全員で読む)

8、課題 (「二度之懸」を読んだ感想を二〇〇字以内に書く) ↓二〇〇字カード配布)

※「かは」の意味、「む・らむ・けむ」の基本的意味

③ 「坂落」の学習 (二時間)

はじめの予定では、くり返し読んで一時間で終わることになっていたが、朗読の練習のとき、生徒が「この場面の変化があつて意味がとりにくいので、今まで通りの授業にしてほしい」と言ったので、変更することにした。

⑦ ねらい

音読を重視しながら、源氏方の勇敢さと平家方の愚劣さ、戦いの悲惨さをとらえさせる。

① 学習 (一斉学習 二時間)

1、筋の展開をまとめる。(大きく三つ、小さく五つ)

2、朗読……二つのグループ担当 (男子四名、女子五名)。源氏方に関する部分と平家方に関する部分を分担して読ませた。(事前に学校で放課後三度練習し、家でも読ませておいた。)

3、第一段へ大手生田の森の戦いV…音読 (全員) と読んで感じ

〔板 書〕



たことの発表(表現面から)
 4、第二段「搦手ひよどり越えの戦い」……「籠読」と「平家方の愚劣」と源氏方の勇敢さ」の対比の発表
 5、第三段「平家の敗北」→音読(全員)と読んで感じたことの発表
 ○青い海に赤い血、あまりに美しい。
 ○身分の低い者があわれだ。
 ○腕など切られる。それでもしがみつく。生きようとする人間の必死の姿がある。

- 6、「坂落」のまとめ
 全体描写やクローズ・アップの手法、平家方と源氏方の対比、落ちゆく者の悲劇
- 7、課題提示……次の「敦盛最期」はグループ学習をするので、「学習の手引き」を全部ノートにやっつけてくること。
 ※「べし」・「の」の用法、「む」↓「う」の変化
- ④「敦盛最期」の学習 (三時間)
 ⑦ねらい
 1、「敦盛の貴族的優雅さと誇り高き自尊心」と「直実の人間性の発現と武士の否定」を読みとらせる。
 2、「学習の手引き」を活用してグループ学習をさせ、各目の読みの拡充をはかる。
 ①グループ学習 (一時間)
 指名読み、籠読後、グループ学習に入る。十班に分ける。一班が四〜五名。仕事分担(責任者・司会者・記録者・発表者・発表助言者)。「学習の手引き」の問題を討議させる。討議記録カードの提出。
 (注)この授業後、二学期末考査。
 ②一斉学習 (二時間)
 「学習の手引き」の問題に従ってグループ討議の結果を発表させ、まとめていった。次の二点は、グループの意見が分かれた。
 ▼「敦盛はなぜ名乗ろうとしなかったのか」
 ○直実がもの数にも入らないような下級武士だから。
 ○熊谷に手柄をたてさせようとしたから。
 ○以前平家に仕えていた熊谷次郎直実が裏切って今は源氏の味

方だから。

○もう頭をはねられようとしているのに、情け(同情)をかけられたので。

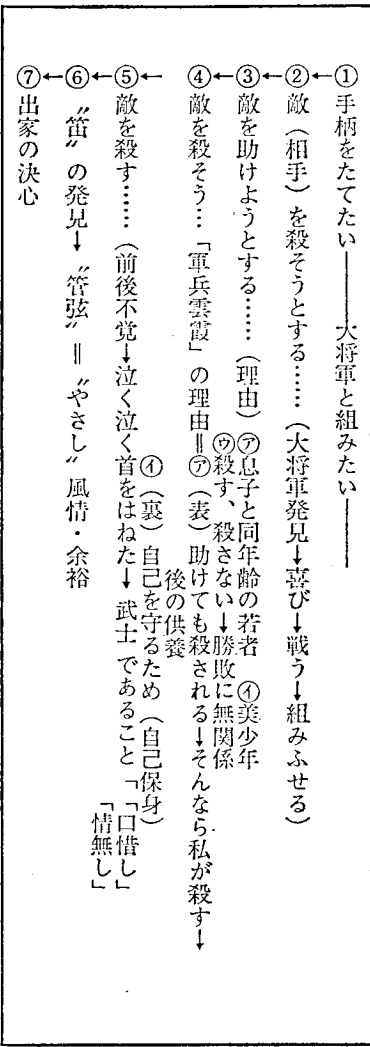
▼「なぜ直実は助けようとしたのをやめて、殺すことにしたのか」

○本人のことは通りとる説↓自分が助けても味方に殺される。それなら自分が殺して後の供養をしよう。

○自己保身(エゴ)説↓「五十騎」を「軍兵雲霞」と言った直実の心理を考えると、味方の前で敵を助けると自分自身の立場が悪くなるので敦盛を殺すことにした。

直実の出家の決心をするまでの心理の流れをまとめる。

《板書》



三学期の授業展開をも考えて、次のような課題を出した。(本文は小学館「日本古典文学全集」の中の「平家物語二」を複写した。頭注、現代語訳も付いている。なお、課題プリントには、課題を考えるための手引きや、感想文を書くための手引きを付けたが、ここでは省略する。一つとりあげればよい。)

△課題▽

(1)登場人物の中から一人(あるいは数人)の人物をとりあげて、その人物について感じたこと・考えたことを書こう。↓たとえば「平知盛」をとりあげるとすれば、彼が息子を見捨てて逃げたこと、愛馬を助けたこと、自分のエゴを告白することなどを読んで、この人物について感じたこと・考えたことまとめる。二人の人物を比較して書いてもよからう。

(2)一つの章、たとえば「小宰相身投」をとりあげて、その章に出てくる人間の生き方について

感じたこと・考えたことを書こう。

(3)一の谷の合戦の場合全体を通して、戦乱の世の中を生きている人間の生き方について感じたこと・考えたことを書こう。

この授業の終わりに、「直実について」感想を書くことを全員共通の冬休みの課題とした。これ以外に、「忠度最期」・「重衡生捕」・「知章最期」・「落走」・「小宰相身投」をとりあげて、

(4)その他、平家物語の表現について、作者の構想についてなどでもよい。また、平家物語の他の部分に出てくる人物でもおもしろく感じている人物があれば、その人物をとりあげてもよい。

⑤グループ研究 (二時間)

「忠度最期」・「重衡生捕」・「知章最期」・「小宰相身投」の中から、自分たちの研究してみたい人物のいる章を決めて、次のような作業をさせ、その研究結果をプリントにさせて提出させた。

- 1、人物に関する研究テーマ
- 2、このテーマを選んだ理由
- 3、「学習の手引き」の問題の解答
- 4、どのような人物として描かれているか
- 5、この人物に対する感想
- 6、残された問題点

予定では一時間でグループ討議を終えるはずであったが、作業の進み具合をみて、二時間にした。

研究テーマの選び方は、「知章最期」四グループ、「小宰相身投」三グループ、「重衡生捕」二グループ、「忠度最期」一グループであった。

⑥「忠度最期」の学習 (一・五時間)

⑦ねらい

忠度が武将としての立派さの上に、貴族的な優雅さを備えている点をとらえさせる。

⑧学習 (一斉学習 一・五時間)

担当グループが、全文の音読とプリント一枚(大体の筋の紹介・

忠度をとりあげた理由「学習の手引き」の問題の解答・感想・問題点)を用いて討議結果を発表した。

授業で問題になったのは、「忠度はもう戦いたくないので逃げているのか」と「味方だとうそをつく忠度と戦い敗れ深く殺される忠度とが同一人物と思いにくい」の二点である。

⑦「重衡生捕」の学習 (二時間)

⑦ねらい

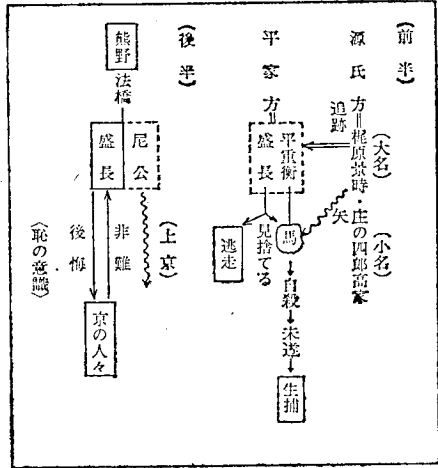
盛長に焦点をあてて、極限状況下における人間の姿について考えさせる。

⑧学習 (一斉学習一時間)

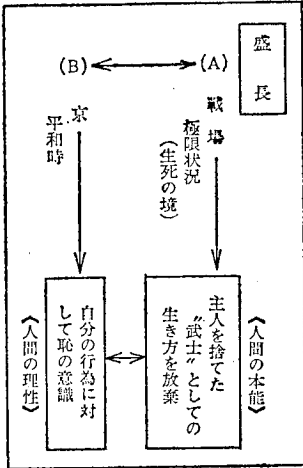
担当グループの一班が、音読をした後、黒板に書いた「あらすじ紹介」図(板書として後掲)をもとにあらすじを紹介し、後はプリントを用いて討議結果を発表した。もう一つの班には、この班の考え方と違う点だけを発表させた。

全体で討議したのは、「重衡は逃げる部下の盛長を見てどのような気持ちでいるのか」と「盛長はなぜ逃げたのか。上京したとき顔を隠したのはなぜか」の二点である。

(板書・生徒が書いたもの)



(板書)



全体で討議した後、次のような板書をしてまとめた。

⑧ 「知章最期」の学習 (一時間)
⑨ ねらい

知章に焦点をあてて、極限状況下における人間の姿について考えさせる。

⑩ 学習 (一斉学習一時間)

音読担当グループが音読した後、発表担当グループが、あらすじの紹介 (四つの場面に分け、黒板に図示し、説明)、知盛をとりあげた理由「学習の手引き」の問題の解答、知盛はどのような人物か、そして知盛に対する感想を発表した。

全体で討議した点は、「息子らを見捨てて逃げた知盛と馬を助けた知盛とをどのように統一のとらえたらよいか。」と「作者はこの章で何を描こうとしているのか。」の二点である。

⑪ 「落足」の学習 (二〇分)

指導者が朗読しながら解説を少し入れた。

⑫ 「小宰相身投」の学習 (四〇分)

⑬ ねらい

戦乱の世における一女性の悲劇をとらえさせる。

⑭ 学習 (一斉学習 四〇分)

三学期中間考査が迫ったので、授業の進め方を変えた。小宰相の心理の変化を発表グループの資料を利用して、まとめた。

「小宰相の自殺をどう考えるか」の意見を聞いた。戦いが、戦場における男の殺し合いにとどまらず、その背後に生きる女や子どもまでも悲しい状況に巻きこむものであるという意見も出た。

この後、「一の谷の合戦の場」を読み終えた後の、生徒の感想を書かせるために、もう一度冬休みの課題の中からテーマを一つ

選んで、原稿用紙(四〇〇字詰め)二枚にまとめて提出する課題を出した。

四 学習者の享受の実態はどうか

「『一の谷の合戦の場』を読み終えて」という読後感想文は、三クラス一三五人中、九四編の提出があった。全て副題をつけて提出させたので、副題に沿って、読後感想文の内訳を分類すると、

(1)登場人物の中から一人(あるいは数人)の人物をとりあげて書いたもの (41)

- ⑦小宰相について……………12
- ⑧平知盛について……………10
- ⑨熊谷次郎直実について……………8
- ⑩平忠度について……………4
- ⑪後藤兵衛盛長について……………3
- ⑫河原兄弟と梶原親子について……………2
- ⑬源義経について……………1
- ⑭河原兄弟について……………1
- (2)「一の谷の合戦の場」全体を通して、戦乱の世の中を生きる人間について書いたもの (48)
- ⑮極限状況下における人間の生き方……………18
- ⑯戦乱の世の中における人間の姿……………14
- ⑰戦乱の世の中を生きる武士……………10
- ⑱戦乱の世の中における女性……………6
- (3)その他 (5)
- ⑳「一の谷の合戦の場」のすばらしさ……………1

①「坂落」について……………1

②平家物語のおもしろさ……………1

③平家物語の表現のすばらしさ……………2

となる。登場人物をとりあげて書いたものが、全体の約四五パーセント、戦乱の世の中を生きる人間について書いたものが、全体の約五一パーセントであった。個々の人物をとりあげて感想を書いたものよりも、「一の谷の合戦の場」を通して、戦乱の世の中を生きるさまざまな人間の姿を幅広くとりあげて感想を書いたものの方が多かった。

以下、紙面の都合もあるので、その一端を紹介したい。

まず第一に、登場人物の中から一人の人物をとりあげて、その人物について感想を書いたものを紹介する。

この場合の感想文には、二通りある。一つは、とりあげた人物にだけ目を向けて感想を書いたものであり、もう一つは、程度の差はあるが、他の人物と比較しながら、そのとりあげた人物に対する感想を書いたものである。後者の感想が、多く見られた。

次の例は、「直実について」と副題をつけた感想文である。

△感想ⅠⅤ 「『あはれ弓矢とる身ほど口惜かりけるものはない。武芸の家に生れずは、何とてかゝるうき目をばみるべき。なすけなうもうちたてまつる物かな』とかきくどき、袖をかほにおしあててさめくんとぞ泣きるたる。」一見、男らしくない、武士らしくない、直実のこの態度。これこそ本当の人間の姿ではないでしょうか。

直実の考え方、行動、性格などさまざまな点を休み時間などを利用して私達何度も話し合いました。直実の生き方に賛成派もい

ました。そして又、反対派もいました。私はみんななどの話し合いの段階では、大の反対派でした。戦いにむかう時すべての人間は生命の大切さをしみじみと思い、生死の共存する戦場ですべての人間は力の限りをつくすのです。それぞれの人間が全魂を打ち込んで戦っている戦場で、敦盛にむかって「助けてやる」などと言う言葉を使った直実は、腐った心を持った武士、いやな人間に思えたのです。こうした私の感想が逆転したのは、この感想文を書こうとした時のことです。私はこれまで、直実を武士の生き方の上でしか見てきませんでした。直実の姿を武士と言っうわくから放ち人間としてとらえた時、私の心に直実が『人間の心を持った人間』である様に写し出されました。それと同時に、直実の様な思いをした武士、すなわち『武士とは何か、人間とは何か』と自分の心に問いかけた者は他の武士にもきつといたであらうと思つたのです。何人もの武士が自分の生き方に苦しんだはずで、苦しんでも、やはり武士として生きた者もいたでしょうし、直実の様に出家の道を選んだ者もいたでしょう。人さまざまな生き方があります。

出家した直実の生き方を「あれは逃避だ」と言う人もいるでしょう。しかし私は、直実の生き方を逃避だとは思いません。出家を決意した時の直実の心は、私達が思う以上に真剣だったはずで、出家するという事は、すべての事柄から逃げることでなく、すべてを失うことなのです。簡単なことではありません。何もかもが自分からなくなるのです。妻も子供も、自分も地位も。私には直実のような生き方はとてもできないと思います。直実の出家、それは真剣に生を見つめてのことだったのです。そしてそ

の結果が逃避であっても、誰にも非難することはできないと私は思います。

人にはさまざまな生き方がある。平家物語の学習を終えて、今私はつくづくそう思います。そしてすべての人は、真剣に自分の道を歩んできた。古典を通してその一端に触れた事は幸運でした。

(N・N女)

この感想は初め「武士」というワク内で直実を見ていて、直実に対して批判的な見方をしていたが、後に「人間」という視点から見直すことによって、直実に心うたれるようになったというものである。直実という人物に対する見方が視座の転換によって一八〇度変わってきたという感想である。

なお、この例は、直実にだけ目を向けて書いた感想のように見えるが、最期の一段落からすると、「一の谷の合戦の場」に登場したさまざまな人間の生き方を頭に置いた中で、直実の生き方を考えている。そのような視野の拡大も、直実観の変化につながったものと考えられる。

次の例は、もっととはっきりと他の人物の生き方を頭に置いて書かれたものである。副題は、「哀れな女・小宰相に思う」である。

△感想2V 女・小宰相を私は、大変弱く卑怯な人だと思つていた。夫の死で、死んでしまうなんて、あまりにも情けない。この女は、結局は現実から逃げていたのであって、数々の理由は、ただの言い訳にすぎない。とにかく、この女を悪く悪く思うだけだった。

だが、だんだんと悪い、弱い女から、哀れで淋しい女にみえて

きた。夫が戦いの場で死んで、その夫の婦りを待つているこの女は、なんと哀れであろう。男が命を捨てて戦っている事は、忠度、重衡、知章等数々学んだ。女は、それら男以上に、重い苦しみで待ち、安否を気づかっているとと思う。それなのに、死んだ夫の妻である小宰相を「弱い」だけで片づけてはいけないようにしたのだ。男と女の立場は、それぞれ違うが、それなりに一生懸命生きたと思う。一方が欠ければ、一方も欠けるような助け合いで。この小宰相の死は当然だとも思えてくる。外から、強く生きろと言われても、「夫婦であったから強く生きられたのです。ひとりになった今では、どうしようもありません」と答えるのではなからうか。それは、いつの世でも言えるが、特にこの戦国時代、男と女は、別れてはいけない条件だと思ふ。小宰相が死を遠んだ事は利口であつたと思ふ。

だが、どちらかが欠けると生きていけないというのも、人間の弱さが出ているのではないだろうか。この小宰相を通して、一つの女の生き方、人間の生き方を考えさせられた。

(H・F女)

小宰相が「だんだんと悪い、弱い女から、哀れで淋しい女にみえてきた。」という感想である。表現に何箇所か気になる所があるが、戦場で生きる忠度、重衡、知章等、「男の世界」と対置する中で、「女の生き方」を考えている。戦乱の世の中を生きる女の背後に、「男以上に、重い苦しみ」があるのとらえたことが、小宰相観を改めるきっかけとなつたようである。

第二に、「一の谷の合戦の場」全体を見通した中で書かれた感想をいくつか紹介する。A感想1・2Vよりも広い立場から登場人物

を見つめるので、多様かつ内容の豊かな感想が多く見られる。

まず、「各章の中心人物に思う」と副題をつけた感想をあげる。

A感想3V この『平家物語』の中で最初に学習した『二度之懸』では、河原兄弟が共に戦いに臨んで、武士としてとるべき心構えに及んで、奮戦し、悲劇であるがゆえの兄弟愛が素晴しく描かれていて、とても感動するものがあつた。又、梶原景時の親が子の景季を想う気持がよく表わされていて、これまた河原兄弟の愛に、けつして引けを取らない親子愛を目の前で見せつけられたような気がした。でも、これとは対照的に『知章最期』では、平知盛のように、わが子を見捨てて、自分だけが沖へ馬を進めたい行動に、梶原親子のような愛は全く伺えないが、そこには人間の弱さが出てしまつたのだと思つた。そのようことはこの他にも『忠度最期』『重衡生捕』などのように戦いの場において、人それぞれ身の上に危険を感じると、そこには人間の弱さが生じて、武士でありながら、武士ならぬ行動が現れるという場面も少なくなかつた。

そして、『敦盛最期』の章では、熊谷次郎直実と敦盛との一騎討ちで、すさまじいものを感じさせられた。それは、直実がまだ十六、七の若將軍敦盛を討たねばならない宿命の状況にあつた時、「武士の身ほどこんなに情けないものはない……。」と、武士である自らを悲しみ、批判しているところだ。同時に、功を焦って行く公達を呼び返したことの悔いを強く感じている。それは、戦いに明け暮れる直実の心に、ふと厭世感が忍び寄るときでもあつたのだと思つた。そういうことがあつて、直実は武家社会の不条理さに耐え切れなくなつて、又、そのもとに仕える武士と

しての自分を失いたくて、とうとう武士の位を捨て仏門の道歩むことにしたのだろう。

又、一味違つて戦さにかかわりのない、罪のない人までが、戦いのために間接的ではあるが死という残酷な姿に追いやられるという悲劇を女性の立場から描いて、当時の不安で悲惨な世相を感じさせられる『小宰相身投』も、見逃せない章だと思つた。

人間である以上、たとえ戦さといえども、尊い命の奮い合ひは人間ならぬ姿の象徴であり、所詮、人間は武士という殻に閉じ籠ることができなさと全体を通して熱く思つた。そして、最期にこの『平家物語』は、戦乱のもとで相戦う武者の勇ましい光景ばかりでなく、いろいろな視野から人それぞれの生き方その背後にある心理を中心に暗闇世相というべき悲惨な世相に生きる人間の姿を、ありのままに讃美して描かれてるように思える。(T・D 男)

この感想は、各章の中心人物の生き方を比較することによって、平家物語が「戦乱のもとで相戦う武者の勇ましい光景ばかりでなく、いろいろな視野から人それぞれの生き方」を「ありのままに讃美して」描いていると述べている。「讃美して」が気になるが、平家物語が無常観思想を観念的に描いたものでなくいきいきと人間を描いている点を感じとっている。

また、「所詮、人間は武士という殻に閉じ籠ることができない」と指摘している。「武士」と「人間」との関係について書いた感想に、次のようなものがある。副題は、「『武士』と『人間』」である。

△感想4 V (前略) ぼくはこの時代の真の武士の姿をこのよう

にとらえた。相手を敵と見ればだれであろうと容赦なく殺す。敵を憐れんだりすることは許されない。そして身分の低い者、身分の高い者、つまり主人への忠誠心をもって、主人のためならば自分の命さえも投げ出す。身分の高い者の首を多くとり、人殺しの策にたけた者が出世する。又、武士は軍のためならばいかなることでもしなくてはならない……といった、非人間的なものだ……。

しかし、彼らは武士である以前に人間である。なるほど、勝ちにのっている源氏方には、この武士道をわきまえた武士が多く見られる。岡部の六野太もその一人で、もはや最後と、目の前で念仏を唱えている藤原の守忠度、念仏を唱え終るのもまたずに首を切りおとした。しかし、それに反して落ちていく平家方の武士たちは、敗戦すなわち死、という極限状況に置かれ、一人の人間にもどつていく者も多い。人間とは弱い生き物なので、そうなつては軍全体のことなどは考えることができず、自分の感情に支配されてしまう。平家方に、新中納言知盛卿という男がいた。彼は、自分の子で、家臣でもある武威守知章と、侍の監物太郎頼方と、ただ三騎になつて逃げた。その途中で源氏に見つかり、戦いとなつた。知盛は立派な武士であったが、多勢に無勢で、子の知章、太郎までが殺されるのをまのあたりに見て、死を直感し、夢中で逃げた。これを、後の軍勢の盛りかえしのためわざと逃げたのだという意見もあったが、やはりぼくとしては、自分の命惜しさに逃げてしまつたと、とりたいて。それだけ周囲の状況というものは人間を弱くしてしまうのだ。

平家物語は大昔の作品で、しかも場面が戦場ではあるが、ぼくはこの文中に現代社会の中に生きる人々の生きざまを感じた。ど

んなに強く、立派に見える人間であらうと、又、それが組織であらうと、極限状況下においては、ごくひ弱な存在になってしまふ。このことは、大きな目で見れば、世界の困々についても言えるだろうし、ばくちの身のまわりにもいくらでもころがっていることだ。わかりきってはいることだが、身につまされる思いがした。このぼくも、いつ平家のようになってしまうかわからないのだから。

(T・K男)

この感想は、「一の谷の合戦の場」の学習を通して、「非人間的なもの」と考えていた「武士観」が変化した、というものである。

極限状況下では死を恐れぬはずの「武士」が自分の命惜しさの行動、自己本位の生き方をしていることを指摘し、さらに、このことは平家物語の時代だけでなく、現代社会でも同じで、自分自身が「いつ平家のようになってしまうかわからない」と述べている。

「知盛」らに人間の典型をみた、なかなか深い読み方をした感想である。

次の感想も、「戦場における人間の立場について」(副題)書いたものである。

△感想5V 戦争というものは、人間の弱さというものをあからさまにしてしまう実に悲しい行為だと思う。なぜ戦わなければならぬか疑問をもちながらも、この時代の人々は、武士という名において、手柄をたてようと殺し合いをするのだ。命を落としても手柄をたてようとした河原の兄弟みたいな者もいれば、命が惜しくて主人や息子まで見捨てた盛長や知盛みたいな者もいる。

又、熊谷次郎直実のように武士であるために自分の息子同年齡の敵の若武者を殺してしまったことを情無く思い、出家した者もい

る。これらの人々は、それぞれりっぱな人間だと思ふ。悪い人間は一人もいない。しかし、この戦乱の世の中では、自分のおかれた立場によつて、その人の行動がいろいろちがってくることに気づく。河原の兄弟にしても彼らが、もつと身分の高い大名だったら、大勢の敵の中へたった二騎で攻めることなどしなかつたらうと思ふ。それに知盛なども、自分が無事に逃げのびた時には馬を助けてやったが、死に直面している時には、自分の息子をも見捨ててしまった。そして直実も、味方がやつてこなければ、きっと敵の若武者を助けていたにちがいない。

そう考えてみると、人間の弱さ、勝手さというものをつくづく感じさせられる。そして、そういうふう人間を変えてしまふ戦争というものが、ひどく悲しいものと思ふ。

特に坂落の最後の場面は、それがよくあらわれていると思ふ。

海へ逃げようとする時に、みんなわれさきに船に乗ろうとするが、船が沈むため身分の低い者は、乗せまいとするのを、船にしがみついて腕を切られたりして海が血に染まっているという場面だが実に無惨だ。そして戦争というものは、男と女の愛までこわしてしまふ。この戦乱の世の中では女の人は、愛する人待つことしかできないなんて、むごいことだと思ふ。そして、その愛する人の死を聞かされた時のショックは、たいへん大きかった。小宰相を自殺するまでにおいつめたのは、やはり戦争だった。

この合戦で、若い人やりっぱな人が、たくさん死んだ。戦いが好きな者は誰もいない。その証拠に、どれを読んでも死んでいく人のため涙を流さない者はいなかつたからだ。それなのになぜ、人間は戦わなければならないのだろうか。それはたぶん人間のエ

ゴイズムからくることだと思いが、しかしやはり、私にとって完全に理解することはむづかしいように思った。(K・M女)

この感想は、A感想4Vと同じように、戦場という生きるか死ぬかの極限状況下における人間の弱さ、勝手を指摘しているが、その上に、A感想4Vと違って一段と高い次元から、戦争というものが人間をさまざまな形で追いつむ「悲しい行為」であると述べている。それだけでなく、誰もが好まない戦争がなぜおこるのかまで考えている。

戦争の残酷さ、悲惨さ、なぜ戦争がおこるのかについて書いた感想は、他にもある。

A感想6V (前略) 極限までおいつめられたとき人間は変わってしまうのである。このような人間の真の姿をまざまざと見せつけられると人間というものがはかなく思えてきた。また、この悲惨な結果をひきおこしたすべての原因は戦いである。そして戦わなければならない武士の立場はいたましい。今では戦いさえなければと思う。(Y・I男)

A感想7V 全体を通して印象に残っているのは、「ざんこくだ」ということである。(中略)でも平家の人々はかわいそう。いえ、平家だけじゃない源氏もだ。ただ平家というだけで殺されて、ただ源氏というだけで殺されて、みんな家族というものがあるのに。第二次世界大戦さえ体験していない私にとっては夢の中の、悪夢の中のできごとのように思われる。なぜこんなに戦いというものがあるのだろうか。今でも地球のどこかで戦争がおこっているのかもしれない。人間は自らの弱さを互いにかばいあって生きてゆくべきなのに……。(F・M女)

A感想6V は、戦争は人間を悲惨な結果に追いつむことを指摘したことにとどまらず、その戦争の中を生きる人間のいたましさ、はかなさまで感じとっている。

次の感想も、同じように戦乱の世の中を生きる人間のはかなさを書いている。副題は、「戦乱の世における人間の姿」である。

A感想8V 一の谷の合戦の場でのまざまな人間の姿を知って、私は戦乱の世での人間のはかなさ、かなしさに気がついた。自分の命大切に子どもをおさざりにした知盛、主人をうらざり、味方の旗印をかなぐり捨てて逃げた盛長、彼らを一口にひきょうだと言ってしまうのはたやすい。でも、そうしなければ生きられなかったのだった。死に直面した時は、親子のきずなや主人への義理なんか無視されてしまう。とてもかなしいことだと思ふ。

帰ってこない夫を待つ女の姿もとてもあわれだと思ふ。いつ夫が死ぬともわからない。夫が死んで自分も生きていけないと、おなかの子供と身投げした小宰相の生き方も、戦乱の世での一つのかなしい女のさだめだったのかもしれない。

落ちゆく平家の武士たちもわれ先に舟に乗ろうと、味方どうしで切り合い、殺されていった。平和な世では考えられないことだと思ふ。

勝った源氏軍にしても、たくさんの死者をだし、又、長い戦乱において破れていった。

こう考えると、人間は戦争というむごい殺し合いをし、自らをほろぼし合って、生きてきた。戦争こそ人間の最大の悲劇だと思ふ。そしてその戦乱の世に生きてきた武士たちこそ、かなしく、

又、はかない人生だったと思う。

(F・S女)

この感想までくると、平家物語の「作者」が、この作品で描こうとした無常観思想も、観念的ではなく、生きた人間を通して感じとられている。なかなかすぐれた感想文である。

最後に、第三として、平家物語の表現のすばらしさについて書かれたものを紹介する。

△感想9▽ 平家物語を学んで、その文章の美しさに感動した。

特に「落足」の章はちりぢりとなって船で漂う平家のさまを、七五調を主とした語りで悲哀をこめて描いたところなどすばらしいという他はない。そして平家物語の文章の美しさは他のものには見られない躍動的な生氣をおびているようである。(後略)

(K・M男)

△感想10▽ (前略) 戦場における生々しさが大変におもしろい。特に、それが負けた平家側に見ることができると思う。人はどうでもよい、自分さえ助かればよいという人間の生命に対するしゅう念、それが、あわれなほど、よく書かれている。

昔の人々が、ビワの音をバックにこの平家物語を聞きながら涙を流したというのを無理のないことだと思ひ、あらためて昔の人々の文章のうまさ、表現の良さに感心する。(K・T男)

五、どのような反省と課題があるか

「『平家物語』をとりあげて、すべての生徒が意欲的に参加することができる授業を成立させるためには、どのように教材化したらよいか。」

この研究テーマのもとに、一七時間の授業を行なったが、「教材

化」のあり方に絞って、この実践で明らかになった点をあげたい。

(1) 「学習のテーマ」の設定について

①「平家物語」は長編物語であるので、一つの「学習テーマ」を設定して、そのテーマのもとで一貫した学習を組織していくやり方は、学習の目標が明確になるので、生徒は意欲的に学習にとりくめたようである。

②「戦乱の世の中を生きるさまざまな人間の姿をみつめよう。」というテーマで「人物像をとらえさせる教材化」は、青春時代を生きる高校生にとって興味深い教材化であるようだ。

(2) 「一の谷の合戦の場」に焦点を絞った教材化について

①「一の谷の合戦の場」には、戦場における兄弟愛や親子愛、義経主従の勇敢さ、主人を裏切って逃げる父知盛、敬盛を殺したがゆえに出家した直実、夫の戦死を聞いて自殺した小宰相など、戦乱の世を生きる実にさまざまな人物が登場している。生徒の感想も、単に登場人物に関する感想にとどまらず、極限状況下における人間の生き方、人間のはかなさまで感じとっている。多種多様、豊かな内容のある感想が多い。「さまざまな姿」といっても天皇・皇族・公家庶民などの姿をとらえることができないう不十分さはあるが、まずこの場面をとりあげたことは成功であったと言つてよからう。

②なお、「人物像をとらえさせる教材化」のもう一つの型に、「特定の人物をとりあげて、その人物の生き方を追求する教材化」がある。この型の教材化にあたっては、山本安英氏・木下順二氏ら八山本安英の会▽による「『平家物語』による群読知

盛」(『日本語の発見ことばの勉強』 未来社、「『平家物語』による群読知盛」風濤社)が、参考になる。戦乱の世の中を生きた人間の典型として、平知盛をとりあげ、この人物の生き方を追求していこうとしたものである。この型の教材化も、生徒の興味をひくであらう。

(3)資料の作り方について

①資料作りは、場あたりのではなく、長期的展望をもって作るべきである。

②導入のための資料作りには、次の二点を必ず入れる必要がある。

⑦この單元では、何を、どのようなねらいで、どのように学習していくかという授業構想の徹底をはかること。授業構想、学習の目標を導入段階で明確にすることは、生徒に課題意識を育てることができるので意欲的に学習させるのに役立つ。

⑧長編物語のある特定の場面や人物に焦点を絞って教材化する場合、全体の中における位置づけを明確にしておくこと。そうすれば、生徒は学習する部分を巨視的に見つけることができる。

⑨本文編の作り方について

⑦「原文に傍注を施した資料」は、文法・現代語訳にばかり気を奪われないで、内容を深く読み味わうことができるので、生徒に好評であった。

⑧しかし、「傍注」のつけ方には課題が残った。「文法・省略の補充・現代語訳」などのつけ方は、高校一年の二期の段階として、また、生徒の実態に対して、これでいいかどうか

か、中学校・高等学校における古典教育の長い見通しの中で、再検討することが必要である。

⑨資料の分量にも問題があった。分量が少し多すぎたと思う。あまり長時間にわたる授業になると、生徒は学習意欲を失うから。

⑩結局、本文編の分量や質は、当然、指導の目標、生徒の実態、時間数などの条件によって決まってくる。

⑪古典の学習に「現代語訳」を用いることの是非についても再検討する必要がある。

⑫学習の手引きについて

⑦「学習の手引き」は、原文を深く理解し、人物像を的確にとらえさせるために、また作者の意図をとらえさせるために、単に問題に答えるだけの手引きではなく、問題解決のための手順・方法も身につけさせるために作成した。これは、生徒の予習や学習のし方を教えるものとして、効果があった。

⑧しかし、高校一年の二期の段階として、この中身でよいかの検討が必要であるし、生徒の抱いた疑問をどのように生かすのかにも課題は残る。

(53・6・6) (広島県立安古市高校教諭)